

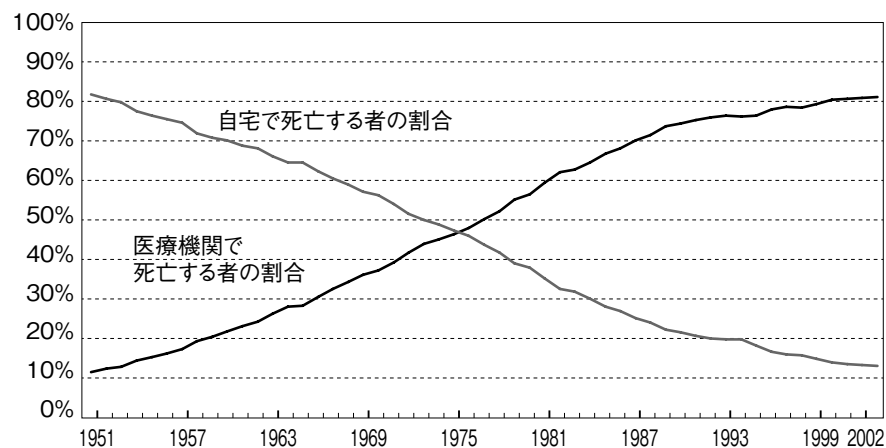


超高齢多死社会で 最期を迎える場を考える 孤独死の実態を訪問診療医に聞く

誰にも看取られずに亡くなる高齢者の報道が後を絶たない。そして、そのほとんどは、異状死扱いとなっている。これから独居高齢者がますます増えていく中で、介護を支える地域包括ケアシステムは機能するのだろうか。その中で独居高齢者は、死をどのように迎えることになるのか。

かつての日本は「家で死ぬ」のは当たり前前の光景だった。1945年には80%以上の人が自宅で亡くなっていた。

図1 医療機関と自宅における死亡割合の年次推移



資料：「人口動態統計」(厚生労働省大臣官房統計情報部)

戦後、医療の高度化が急速に進み、73年の老人医療費無料化などもあって、76年には病院など医療機関での死亡数が自宅死を上回り、その後も増え続け、近年は80%になっている(図1)。

一方、「自分自身の最期をどこで迎えたか」を尋ねた調査では、49.5%の人が「自宅」と答えている。さらに「実際に死を迎えると思う場所」を聞くと、「自宅」は16.6%に減り、医療機関は41.1%に増え、「やむなく病院で死ぬ」と想定している人が多いようだ。そして、実際は80%以上の人が病院で最期を迎えている。希望する死に場所と実際に亡くなる場所とが乖離しているのが現実である(図2)。

高齢で日常生活が困難になった場合、自宅で最期まで療養しない理由に「家族の介護などの負担が大きい」、「緊急時に家

立川在宅ケアクリニック院長 莊司輝昭 Teruaki SHOJI



岩手県出身。外科、在宅緩和ケア医。東京都立川市にある立川在宅ケアクリニック院長を務める。2017年「第20回日本在宅ホスピス協会全国大会」(主催：日本在宅ホスピス協会)の実行委員長となる。